

戦前日本における学生オーケストラの曲目選択に関する実証研究

井上登喜子

本研究は、昭和戦前期までの日本における西洋音楽の受容過程を解明するために、西洋音楽のジャンルであるオーケストラ音楽のレパートリー形成を実証分析するものである。本論は、西洋音楽が広く一般に普及する過程で若者のインテリ層が中心的な役割を担ったことを考慮し、明治後期から大正期にかけて全国に設立された学生オーケストラ9団体による1941年までの405回の演奏会とそこで演奏された管弦楽レパートリー（のべ数 1,560）をサンプルとする。そのうち演奏頻度の高いレパートリー上位10曲を抽出し、演奏会におけるこれらの曲目選択が他団体やメディアといった外部からの影響を受けていたとの「曲目選択の外部要因仮説」を検証する。本分析は、演奏会で特定の曲目の演奏が行われるか否かという二値の選択に関する要因を測定するものであり、質的なデータを示す二値変数を被説明変数とする分析に適しているロジスティック回帰分析を用いる。説明変数には、学生オーケストラの曲目選択に影響を与えたと予想される外部要因として「他団体」と「メディア」の2種類を取り上げる。「他団体」要因として用いるのは東京音楽学校と新交響楽団である。「メディア」要因については、「紙メディア」の代理変数として音楽雑誌を、「新しいメディア」の代理変数として国産の洋楽レコードを用いる。

分析の結果、個々の曲目では様々な要因との関連がみられるものの、全体としてみると、学生オーケストラの演奏会における曲目選択は音楽雑誌や国産レコードというマス・メディアとの強い関連を持っていたこと、その影響は1926/1927年を境に音楽雑誌から国産レコードへと移行したことが明らかになった。この結果は、「紙メディア」中心の時代から新しいメディアの登場という、大正から昭和初期にかけての情報伝達の変化の影響を明確に示しており、本論はデータをもってレパートリー形成へのメディアの影響を初めて示した研究と言える。